英知通信

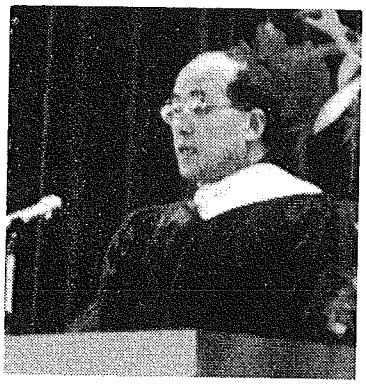
発行
英知大学
兵庫県尼崎市若王寺
2—18—1　（〒661）
℡（06）491 — 5083
編集
英知大学広報室

1983. 3. 31　UNIVERSITAS SAPIENTIAE　No.36

卒業式式辞

「英知で身につけたもの」

学長　傘木澄男



本日ここにご来賓各位、また卒業生のご父兄の方々をお迎えし、本学教職員並びに在学生の皆さんと共に第十七回英知大学卒業証書授与式を挙行いたしますことは、私のこの上ない喜びであります。卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。ご父兄の皆様にも心からお喜びを申しあげます。

きょう卒業される皆さんが本学に入学されました日、私はここで皆さんに次のように要望いたしました。

「皆さんがカトリック大学である本学に入学されたことの意義は何か。それは建学の理想として英知というカトリックの人間教育・人格形成の理念を掲げている本学において、皆さんがキリスト教との、特にカトリシズムとの出合いという絶好の機会が与えられたことにあり、それとの四年間の触れ合いを通して、一生の基盤となる正しい価値観、倫理観を身につけていって欲しい。」こういう要望でありました。今、ご卒業に当り、皆さんが本学において授業その他いろいろな体験を通して身につけられ、あるいは深められましたカトリシズムの理解が、これからの皆さんの一生に如何なる意味を持つのかまたいかなる働きをしていくのか、二、三の観点から考えてみまして、皆さんへのはなむけの言葉といたしたいと思います。

広い連帯の中で

カトリシズムの精神として注目すべきまず第一の点は、自分のからを破って、広く外に開かれてあること普遍性ということであります。カトリックとは、この「普遍」ということを意味する言葉です。「私達人間は神の子としてみな兄弟である。だからみんなのことを、人類全体のことを考えなければならない。個人や集団のエゴイズムを超えて互いに人間同士として尊重し合い、愛し合わなければならない」ということであります。自分さえ、あるいは自分の内輪の人々さえよければということではなく、誰にとっても良いと云えるものこそが本当の価値であるという、普遍的価値を重んずることです。先程聖書朗読で読まれました「善きサマリア人の喩え」でキリストは隣人愛ということを教えられました。

「隣人とは限られた内輪の人達だけではない。あなたの助けを必要としている者は誰でもあなたの隣人である」と教えられたのであります。

この点、私共日本人は大変閉鎖的でウチと外とをはっきり区別し、自分の家族や会社、仲間や日本人同士という、内輪仲間では親密に交き合い団結もしますが、外に向ってはからを閉ざしてしまうのです。誰とでも人間同士として交き合い、結ばれるということが苦手です。そのために外国の人たちから、日本人は個人的にはいいが集団になると排他的になるとか、集団だと強いが個人だと弱く、粗野で醜いというような批判をしばしば受けるのです。国際化の時代を迎えて、外国の人々と協力してやっていかなければならない私共これからの日本人にとりまして、このような閉鎖性は重大な障害となります。国際人とは外国の言葉や習慣を覚えて外国でも活躍できる人、というだけのことではありません。一番大切な資格は、自分は一人で、あるいは少数で孤立して生存しているのではない。自分を超える大きなものに繋がれているのだ。大きな連帯の中にあるのだ、という自覚です。皆さんはこれからいろいろ複雑な人間関係の渦中へと入っていかれるわけですが、今日の風潮となっているマイホーム主義、あるいは近頃は自分さえよければというミーイズムなどという、狭い閉鎖的な態度から絶えず脱却し、多くの人々との広い連帯の中で生きていくことが大切であることを、そしてこれこそが人間存在の最優先の課題であるということを忘れないようにして頂きたいのであります。

価値観の確立

カトリシズムの目指す第二の点は各自が自分自身の価値観・道徳観というものを確立し、自主性・主体性をもって生きるということであります。日本人と西洋人を比較して一番目立つ相違は、西洋人が個として確立された自我を持つのに対し、日本人にはそれがなく、自分の属する集団を優先して、それにひたすら順応することを大事にするということです。そのために自己の内面・主体性ということがおろそかにされ、行動の規準は勢い外面的な形式主義に陥り、世間体や体裁が重んじられるのです。キリスト教はこれと反対に形式を打破して、心を重んじます。キリストはファリサイ派の形式主義を真向うから批判して、「霊と真実による礼拝」即ち「心の宗教」を確立されたのであります。

わが国では高度経済成長の時代は過ぎ去りましたが、そのあとに物質主義的な生活態度が居坐っています。宗教も道徳も、倫理も思想も、すべてが物質主義の前に平伏してしまったかのようです。そういう風潮からエゴイズムが、家庭の崩壊が、そして人間不信が起っています。しかしそうした中で今日、物ではなく、心の豊かさ、精神的な満足こそ人間の幸福であるという自覚が除々に強まり、社会の流れは少しずつ変りつつあるように見えます。近頃中学生など年少者の家庭や学校での暴力行為や非行が多発し、そのひどさは人々を憂慮させ、深刻な社会問題となっています。こうした事態は今までの日本人の生き方に何か重大な誤りがあり、そのつけを今こういう形で払わされているのではないかとも考えられます。年少者の反逆や暴力は社会に対する抗議であり、問い掛けであります。出世コースや安楽な生活を最高の幸福とするような物質万能主義の尺度では、人間の世の中にもう救いはないということを、本当の幸福は「人間とじていかに生きるべきか」を子供達と共にまじめに探究すること以外にはないということを、私達は今、痛みをもって勉強させられているのではないでしょうか。

宗教とは日本でしばしば誤解され

ているように単なる冠婚葬祭の形式や、いっ時の気休め、神頼みにすぎないことではありません。宗教とは生活そのものです。「人間としていかに生きるか」ということです。従って人間の生活の隅々にまで影響を及ぼしてくる事柄なのであります。人間が人間らしく生きていくためにはしっかりと自覚された価値観が必要です。ただ「まじめに、ひとに迷惑を掛けないように生活し、そしてマイホームを作っていきたい」というだけでは、余りに理想が低すぎて、これでは自分の幸福も他人の幸福も決して作ることはできません。

ところでカトリシズムはこうした大切な世界観、価値観の問題に立派な解答を出しているのです。私は皆さんがここでもう一度正しく世の中のことを見直して、現今の風潮に流されることなく、反対にそれを変えていくような見識と勇気ある生き方を心掛けていかれますよう切に要望するものであります。

未来への希望をもって

第三に、そして最後に、カトリシズムの心は未来を信じ、未来に希望することにあります。キリスト教は旧約の宗教の強い歴史意識を承け継いで、天地創造という始まりから世界の終末にまで延びていく一直線の時間として、即ち歴史として、世界と人間の存在を見ています。人間の一日、一年、一生は短く、まことにはかないものと見えますが、実はその背後には三百万年の人類の歴史があり、更に霊長類六千万年、脊椎動物五億年の歴史を持っているのであります。人間が歴史的存在であるとは人間には未来があるということです。過去の遺産の上に、良いものは更に積み上げ、誤りは謙虚に改善し、つねに希望をもって未来の可能性に挑戦していくという生き方であります。私共日本人はこうした歴史感覚を欠いているため、未来に希望することを知らず、振り返っては過去を嘆き、未来に向かっては新規まき直しの一発勝負に賭けるといった、独特の傾向が見られます。これからは何事も世界中の人々と協力してやっていかなければならない私達日本人は、目を未来に向け、忍耐と希望をもって自己と社会を変革・改善していく、そういう態度への転換を迫られているのであります。

皆さんは今後、どんなにつらいことや苦しいこと、失敗や挫折がありましても、決して日本人特有の諦めや絶望的な自己破壊に走ることなくあくまでも未来の可能性を信じて強く生きていく人であって下さい。

英知の卒業生として

さて私は本学の精神であり、また皆さんが本学在学中学ぶところのありましたカトリシズムの立場について三つの点を申し述べたのでありますが、皆さんが今後何事におきましても、この三つのこと、即ち人々との広い連帯を求め大切にする心、自主性・主体性のある生き方、そして未来への希望と勇気、これをもって当っていかれますならば、どんな局面でも打開することができ、職場においても、あるいは家庭づくりや子育てにおきましても、きっと良い結果を生んでいけるでしょう。そしてこれこそが私は、皆さんが今後英知大学の卒業生として生きていく最もふさわしい心構えであると信じ、期待しております。

皆さんは、近い将来我が子の、そして新しい世代の養育・育成に直接携わることになられると思いますが、この尊い大切な仕事において成功する最大の秘訣もまた、この三つの心構えの内にあります。自分の家庭のことだけにかまけていないで、人を分けへだてなく大切にし、広く世の中のことに関心をもって参加する親。世間の風潮に流されずに、自分自身のしっかりした価値観・倫理観にもとづいて行動する親。そしてグチをいわずに、いつも前向きに、自分を改めながら子供とともに成長していく親。そういう親や大人を見て育つ子供は、きっと同じような人間に、即ち非行や暴力などとは縁のない、心身共に健全な人間に育つことでしょう。

皆さん、大学を卒業するということは、ただ学校を終えるだけではなく、ご両親・ご家族の愛情に依りかかった生活にも別れを告げることです。これからは一人前の人間として自分自身の力で立ち、囲りの人々に自分の方から愛情と配慮を及ぼしていくのです。また卒業は、学業を終えることであって、勉強を終えることではありません。本当の勉強はこれからなのです。今日は皆さんの始業式でもあります。皆さんは本学において身につけられた良い土台の上に、これからどうか、心豊かな、充実した人生を礎き上げていって下さい。そして実社会において英知大学の卒業生としての自覚と誇りをもって立派な人間として活躍して下さい。

「教育とは、学校で習ったことをすべて忘れた後に残っているところのものである。」これは物理学者アインシュタインの言葉です。皆さんが今日、あるいはいつの日か、「自分は英知大学で、よそでは得られなかったものを得たのだ。英知へ行ってよかった」と心から思って下さることがありますならば、私共にとりましてこれ以上の喜びはありません。

終りに皆さんの前途に神の御加護と豊かな御祝福がありますように祈りまして、心からのお祝いの言葉とさせて頂きます。

新たな決意で母校をあとに

――昭和五十七年度卒業式――

木の芽がふくらみ始めた三月十九日(土)午前十時から本学講堂において第十七回卒業式が挙行された。新たに設置された最新式の電子オルガンがメルオー教授によって初めて演奏され、その音色に送られて、神学科六名、英語英文学科一二九名、西語西文学科四十一名、仏語仏文学科二十七名、計二百三名の新卒業生が社会へ巣立っていった。

傘木学長から卒業生一人ひとりに卒業証書が授与され、学長式辞（別掲）のあと、来賓の吉田宏後援会会長は、「自分にプラスになる人との交き合いを心がけ、自分以外の人のこともよく考えて、どんなことにも骨身を惜しまず努力をする人間、そして国際化社会に通用する人間になり、新しい日本のイメージを諸外国に伝えてほしい。」と祝辞を述べられた。次いで同窓会を代表して美濃部嘉章氏からも先輩としての心のこもった激励の言葉が述べられた。式のあとクラス別の記念撮影があり、振り袖姿のあでやかさの内に、卒業生は互いにいつまでも別れを惜しんでいた。今年度の学科賞受賞者は次の通りである。

学科賞

英語英文学科　笠井　秀岐

西語西文学科　三原　彰

仏語仏文学科　小寺　直美

イスパニア大使賞　塚正　美子

木村　望

阿部　美枝

清岡　雅宏

西垣　要

松本信愛助教授学生部長を退任

松本学生部長は三月三十一日付で学生部長を退任し、四月から宗教主事に就任される。新学生部長には西山俊彦教授が就任。松本先生は昭和四十六年四月以来、学生課長として、また二年八カ月のイタリア留学後は学生部長を兼任して、学生部の仕事に尽力された。新入生を対象としたアドバイザー制の導入をはじめ、毎年の海外研修旅行を発展させ、本学とアメリカの姉妹校ローラス大学とを結ぶ窓口でもある国際交流委員会を発足させた。新入生のための学外オリエンテーションの実施、課外活動の充実、対南山大学定期戦の発展を計るとともに、学生の生活全般にわたる相談や、時には父兄を交えた相談に応じるなど、学生部のかなめとして活躍、大きな功績を残された。今後は宗教主事として、また国際交流委員会等の仕事に、いっそうの活

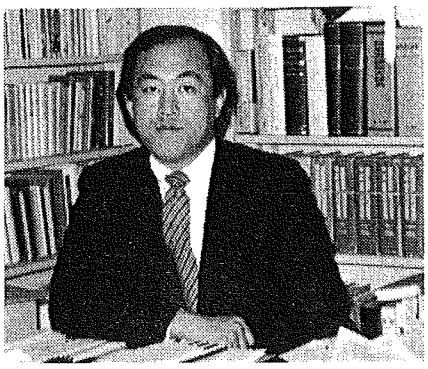
躍が期待される。松本先生は今後の抱負を次のように語っておられる。

「学生部長として得た経験を生かして今後はチャプレン（宗教主事）として、学生たちのあらゆる悩みや相談を聞く話し相手となるなど、一般学生の主に精神面でのバックアップをしていきたい。宗教主事室というのは大学のハートだと思うので、大へんやり甲斐がある。」

オニールに焦点を合わせて

井田規文
（英語英文学科講師）

ユージン・グラッドストン・オニール（Eugene Gladstone O'Neill）（一八八八～一九五三）が私の当面の研究テーマである。特に彼の人間観を分析・総合しようというのがその目的である。いささか手垢のついた研究と言えなくもないが、最近のオニール研究の動向を見ていると、どうも研究対象が多岐にわたるその一方、微に入り細を穿つ程に新しい資料を漁り、新種を狙うといった向きがある。それはそれで面白いし、また新しい事実を発見することも必要なことである。しかし、その反面、オニール研究の原点ともいうべき彼の人間観に関しては、常套的にある一定の枠を固定してしまって、その方面の研究が停止した感があるのは否めない。



オニールを読む場合、彼が普遍的な人間を描くことを何よりも作家としての使命としている以上、彼の人間観を考察した上での研究がなされねばならない。それはまた時代と共に変容するものであって、決して固定化されるものではない。そこにオニール作品の古典としての大きな価値が見られるのである。

アメリカ演劇におけるオニールの位置は大きい。シェイクスピアに比肩出来る劇作家をアメリカで見い出そうとすれば、オニールである。彼以後の劇作家は、いずれも彼の影響を多分に受けている。つい先日急死したテネシー・ウイリアムズは、オニール劇の特徴の一つである人間の内面を表現する手法を取り入れた作家であった。アーサー・ミラーにしてもエドワード・オールビーにしても、オニールが切り開いたシリアスなドラマの後継者たちである。

オニール以前のアメリカの演劇と云えば、娯楽趣味一辺倒で、ドタバタ喜劇が大半であった。真面目なものといっても多くはイギリスやフランスからの借り物で、「ハムレット」や「モンテ・クリスト伯」を舞台に載せても亜流でしかなく、大衆娯楽の域を脱していなかった。

そこへ、オニールが「トランクに一杯」真面目な台本を詰め込んで登場したのである。彼の作品はいずれを読んでも、「人間とは何であるか」という問いかけを我々に呼び起させる。それは、オニール自身が戯曲という表現手段を用いて、この哲学的な命題を提示しようとしているからである。このような作家は、それまでのアメリカ演劇界には数少なく、まして、この問いかけを大上段に構える劇作家はオニール一人であった。観客は、この真面目な劇作家の新風を大いに注目し、歓迎したのである。

オニールの隆盛期の一九二〇年代三〇年代は、世界中がいわば暗黒の時代で、第一次大戦の後を受けての経済恐荒、そして第二次大戦と、全く「芝居どころではない」時期であった。そういう時代であっても、むしろ、そういう時代であればこそ、オニールはひたすら、「人間とは何か」を問い続け、作品を書き続けたのである。このエネルギーは何処から湧き出たのであろうか。私は、彼の人間への飽くなき信頼であろうと考える。この言い方は少々逆説的である。つまり、これまでのオニール批評の多くは、オニールが人生に絶望した作家として看做しているからである。実際、彼の作品は殆んどが悲劇で、喜劇と呼ばれるのは「ああ、荒野」（Ah, Wilderness, 1933）だけである。この作品にしても悲劇的要素を多分に含んでいて、筋の裏を返すと悲劇的結末になりかねない状況を描いている。彼の作品は、確かに暗い。人間の暗い、そして醜い面を殊更に捻り出そうとするかのようである。例えば、実際の彼の家族をモデルにして書いた「夜への長い旅路」（Long Days Journey into Night,1956）を読むと、家族の間に深い不信の亀裂を生じた家庭が、スキャンダラスなまでに、生々しく描かれている。しかし、この人間の醜さ、暗さの暴露は決して人間を見捨てたり、絶望視したりするのではなく、むしろ、暗黒の中にあって、なおも、その暗黒と対峙する人間を描くことが出来るのは人間を根本から信頼しているからであろう。

今年度四年生を対象に読むことにしているオニールの中期の大作「喪服の似合うエレクトラ」（Mourning Becomes Electra, 1931）においても、オニールの人間への信頼を読み取れる。そこでは、悲劇的な人生を決して逃げることなく、正々堂々とそれに立ち向って生きる人間こそ崇高な人間であると言い切っている。人間は己の人間としての弱さ故に、不幸を引き起す。しかし、その不幸に押し潰され乍らも、なおもそれに人間としてのプライドを持ち続け、たとえそれが自分の死に至ると分っていても、その死を受け入れるのが人間であり、あまりに人間的であるが故に、弱い人間は、実は人間として最も価値のある偉大な人間であるというオニールに、私はパスカルの「パンセ」に見るような、絶対的な人間肯定を見い出すのである。

私は、大学院で幸運にもオニール研究の権威である山内邦臣先生（現・竜谷大学教授）から、はじめてオニールを深く読む指導を受けて以来オニールの魅力に憑かれているが、依然として、難解な作家である。

昨今、ホーソン学会、メルヴィル学会、ソーロー学会、フォークナー学会と、アメリカ文学における主要な作家の研究会が、相い次いで設立されているが、オニール学会は未だ独立した形を取っていない。恐らくオニール生誕百年目に当たる一九八八年にはオニール学会の烽火もあげられることであろう。我ながら、微力の限りを尽して、今後の研究に当たろうと決意している次第である。

昭和57年度就職状況

一、全般的状況

57年度はマスコミの報道どおり世界的不況の影響を受け、今までにない厳しい就職戦線となりました。企業は不況対策として省人化に徹し、OA革命・FA革命など機械化をどんどん進めています。今後この傾向はますます強くなると予想され、これからは当分「就職さえできれば」という厳しいものになりそうです。

特に大卒女子に関しては、ほとんどの企業が採用を見合わせるか、採用人数を大幅に減らすなど、正に女子学生にとっては「どしゃ降り」の状態でした。

二、英知大学の状況

このような全般的状況は、今までオイル・ショックやそれに続く不況の波にもほとんど影響されなかった本学の就職状況にも影響しはじめました。特に女子の方に大きくこの影響が出てきました。

男子・女子共に早くから計画的に活動した人とそうでない人とでは、その結果に大きな差がはっきりと現れました。

三、本年度の就職率と主な就職先

㈠就職率　（単位%）

	男	女	計
英	九三・三	七六・〇	八六・〇
西	一〇〇	一〇〇	一〇〇
仏	一〇〇	八三・三	九四・四
計	九五・八	七九・六	九〇・三

㈡主な就職先

キャセイ・パシフィック航空、国際電信電話、銭高組、全日空ホテル、大正相互銀行、大陽神戸銀行、大丸百貨店、東洋ホテル、日清製粉、日本生命、阪急国内空輸、阪神電鉄、丸紅石油、横浜ゴム工業、その他。

（職業指導課・58年2月末現在）

『方向転換 面舵一杯』

西出裕美
（昭和五十七年度 英語英文学科卒業生）

英知大学、それは今の私を生んでくれた母のような存在です。本学に入学した当初は高校の延長のように友人と騒ぎ、先輩に親しくしていただく生活に夢中で、学ぶ目標が定まっていませんでした。ところが通訳ガイドの仕事を通じて知り合った世界各国の人達との会話から、私は自分の甘さを思い知らされるようになりました。日本以外の国では将来必要な技術取得のために大学に進み、アルバイトをする間もない程真険に学び、指導を求めるのが学生の姿だと聞き、ただ学歴社会に生きる日本人学生とははるかに異なる点を知ると同時に、自己の学生としてのあり方に疑問を持つようになりました。次第に講義を真剣に聴くようになり、授業の楽しさ、素晴しさ、新しい事柄を発見する喜びを初めて知りました。

この時から私は生まれ変わったと思います。勉強といえば試験や受験のためのみ無理にするものだと思っていたからです。そして普段何気なく目や耳にする事柄、つまり人間と深く関る一般教養を土台として専攻する英米文学を研究する事は、自己を、人間を見つめる事につながり、非常に興味深いものである事を発見したのです。それと同時に英知大学の先生方の素晴しさを改めて理解しました。他の大学に進んだ友人達は私の英知の話しをいつもうらやましがってくれます。例えば少人数制のため学生は全学年を通じて互いに顔見知りで親しく、先生と話す機会にも恵まれています。マンモス化した大学ではとても考えられない点です。キャンパスでお会いすると先生は必ず足を止めて話しかけて下さり、勉強以外のあらゆる相談にも応じて指導して下さるので、大学に父母がいるような、穏かな気持ちと同時に、お会いした後は必ずいつも図書館や書店に走り込みたくなるように、何かを示唆し、興味を高めてファイトを起させて下さる雰囲気に包まれているのです。この事は生まれ変わった私をさらに成長させてくれました。また大学職員の方々も、私達一人ひとりにとても親切にして下さり、学内のどこにいても愛情が感じられ、清潔で落ち着いた大学とピッタリのイメージです。

このような環境の下で私は新しい自己に挑戦する気持で弁論大会に参加しました。2回生の10月、大きな大会でしたが、「参加する事に意義がある」の精神で大阪市主催英語弁論大会に出場し、夢のサンフランシスコ市長賞を受賞、更に大阪市姉妹都市サンフランシスコの親善使節に選ばれて二か月間渡米し、色々な行事に参加する幸運を得ました。この時私はつくづく英知に来て良かった、今の私は英知に来ていなかったらきっと存在していなかったと思いました。そして学年を重ねるにつれて、私を案じ、指導して下さる先生にあこがれるようになり、また学ぶ事の楽しさのために大学院進学を決心しました。誰もが驚いた方向転換でしたし、私自身大きな賭でしたが、恩師に一歩でも近づきたいというあこがれをエネルギーに受験し、再び夢の様な大学院入学のパスポートを手にする事ができました。

また未熟な私ですが、学内で人への思いやりの輪を広ろげられたらという気持ちから、有志と顧問の先生とで結成したボランティア研究会が色々な問題を抱えながらも、先生学生の皆さん、ご父兄、尼崎の地域の皆さんにご理解とご協力をいただける部になり、今後を期待していただけるクラブになりつつある事を嬉しく思っています。

この四年間を振り返って思うことは、英知大学は個人の可能性とファイトをひきだし、それを最後まで完全に開発し、育ててくれる大学であるということです。英知大学を卒業することは両親のもとを離れるような思いで寂しいですが、優しく暖かい母、力強く厳しい父から学んだ事柄を忘れず、英知大学卒業生としての自信と誇りをもって大海へ出航し、恩師に一歩でも近づきたいというあこがれを現実のものとできるよう、より一層努力し続けたいと思っています。後輩の皆さんが豊かな大地の恵みを充分に受けられ、目標達成に励まれますようお祈りしております。

＊　＊　＊

研究室だより

西山俊彦教授（教養課程）京都大学より教育学博士号を取得

西山教授は過去約10年に亘って本学紀要「サピエンチア」並びに関連学会誌に発表した数多くの論文を「宗教的パーソナリティの心理学的研究——Fスケール並びにCPIによる分析——」の標題のもとにまとめて京都大学に提出し、厳しい審査の末教育学博士の学位を認められ、去る三月二十三日学位授与式が行なわれた。この研究は宗教と人間形式との関連性を『自我確立』なる心理学的観点から体系的に究明することを意図し、実証化したものである。西山教授は米国セントルイス大学の社会学博士号を保持しておられるが、京都大学での論文提出による博士号取得は文科系では非常な難関で、今回も授与数一七八件中僅かに四件であった。

研究発表

西山俊彦教授（教養課程）
「組織効果の測定手法と事例結果の部分的検討」
KSP第八十二回例会　昭和58年3月26日　於京都大学教養部

英知大学論叢「サピエンチア」第十七号掲載の研究論文

西山俊彦教授
「もの」の諸相と価値基盤
——社会学的立論への予備考察——

奥村和滋講師
道徳的当為と存在論的背定
——道徳教育の根源場を求めて——

G・ベーキ教授
Tao and Logos—A comparative Study on the Chinese Tao and the Logos of St John's Gospel—

和田幹男教授
イザヤ50,4－9aの批判的研究

中野正勝助教授
——「一」と「相異」を中心として——

井上博嗣教授
What Is Wrong With Robert Cohn?

DJ・グリフィン講師
Characteristics of Sean O'Faolain's Humour as Revealed in THE SILENCE OF THE VALLEY

芝垣哲夫講師
言語と文化　——英語に見られる狩猟民族的特性・日本語に見られる農耕民族的特性——

井田規文講師
A Reading of *King Lear* (II)

J・L・アルバレス教授
VALIGNANO SELECCIONADOR DESUEQUIPO MISIONERO EN JAPON(1593)

石野好一助手
等位接続詞 *et, ou, ni* について

興津憲作教授
民謡三味線における伴奏様式

M・ペニュエラ教授
Introducción al Estudio de Pemán

出版

G・ベーキ教授（神学科）は昨年十二月にあかし書房から「心の細道」を出版した。（二二一頁。一、四〇〇円）

井上博嗣教授（英語英文学科）は二月に中央出版社から「新しいキリスト教入門」を出版した。（二二九頁。九〇〇円）

慶弔

結婚

山口忠志講師（西語西文学科）3/13
山西令子（旧姓関岡・庶務課）3/21

石野好一講師（仏語仏文学科）
長男出生　昨年12/27

訃報

森本博文（西語西文学科二回生）
昨年十二月六日、神戸大学付属病院で心不全のため死亡。